

水の道コースには、こんなにすてきな見所があります。あなたはどこに行ってみます？

### 歴史に守られてきたアーティストの競演

#### ① 鵜飼

長良川の鵜飼は古典漁法を今に伝える岐阜市の夏の風物詩。その歴史は古く、1,300年以上前にまでさかのぼることができる。織田信長は鵜飼を保護し、「鵜匠」という名称も信長が付けたという説もある。江戸時代は、徳川家も鵜飼を見物し、尾張徳川氏は鮎を将軍家に献上するため、長良川の鵜飼を保護し漁業者に「鵜匠」の名を許していた。俳聖・松尾芭蕉も「おもしろうて やがて悲しき 鵜舟かな」という有名な一句を残した。また、昭和11年と昭和36年の2度にわたり、チャップリンも見物のために来岐。鵜匠をアーティストと賞賛し「ワンダフル」を連発したといわれている。鵜飼は鵜匠が10～12羽の鵜を見事な手繰りばきで操り、鵜が鮎を捕る日本の伝統漁法の1つ。毎日鵜とともに暮らす鵜匠は代々世襲制で、常日頃から鵜と一緒に生活しているため、鵜匠と鵜は呼吸の合った動きを見せ、見事に鮎を捕らえてくる。暗闇に満ちた水面にかかり火を焚いた鵜舟がゆっくりと現れ、鵜が鮎を捕らえる様子を眺める事ができる。目の前で、勇壮な歴史絵巻が繰り広げられ、幽玄の世界へと誘う。鵜飼観覧船はもちろん、右岸に整備されたプロムナードからも楽しむことができる。

### みなとは海だけにあらず

#### ② 長良川湊跡

16世紀中ごろ、斎藤道三、織田信長の頃から、この辺りは中川原、明治時代には富茂登(ふもと、金華山の「麓」が語源か?)村と呼ばれていた。ここには、道三により早田や美園とならび市場が開かれ商業の拠点として繁栄していたとされる。道三は城下町を作るにあたり、ここから上流にかけての場所に川湊を設け、長良川の上流域で豊富に産する美濃紙、木材、茶などや、当時からブランド品であった関の刃物が、ここを介して全国に販売されていた。江戸時代には、舟運が大変に盛んになり、下流からは伊勢湾の魚介類や昆布あるいは塩などが舟で運ばれてきた。寛永13年(1636)には積荷の通行税や筏乗りや荷揚げ人足の管理をするために、川役所が設けられた。

### 芭蕉の気分で鵜飼を見よう

#### ③ 芭蕉の鵜飼見物場所

芭蕉の「十八楼ノ記」に、芭蕉は長良川の鵜飼を「伊奈波山の陰」で見たと記されている。これは現在の長良橋南詰め(左岸)のやや上流辺りだとみられている。

### 儲かる所に役所あり

#### ④ 川役所跡(川荷税関)

江戸時代、長良川の舟運は大変に盛んだった。かつて、ここには中河原湊があり、長良川上流から美濃の特産物である美濃和紙をはじめ竹・材木や酒・茶、関からは刃物が、そして下流からは伊勢湾の魚介類や昆布あるいは塩などが舟で運ばれ、各地に販売された。こうした積荷に課せられた通行税を徴収するため、寛永13年(1636)、尾張藩によって長良川役所が設けられた。筏乗りや荷揚げ人足などの管理も、川役所の仕事で、藩の国奉行や代官の手代が常駐した。また、実務は付問屋の商人が行なった。中河原湊からは、享保8～10年(1723～1725)の間に、年平均1,700艘の舟が下ったと、川役所の記録に残されている。

### 川縁にはムクノキ

#### ④ 川役所跡のムクノキ

かつては、川湊、堤防など川縁にムクノキがよく植えられた。成長が早く、枝をよく広げて目立つからといわれる。

### 杭州市の魅力を含め込んだ庭園

#### ⑤ 日中友好庭園

平成元年(1989)、岐阜市と杭州市(中国)の友好都市提携10周年を記念して造られた庭園で、岐阜公園の北部に位置している。庭園入り口の雌雄対の獅子、中国風の門・土塀・東屋などが異国情緒を醸し、また杭州市の名所である西湖を模して造られた池が四季の風景を映す。春は桜の名所として親しまれ、夏の新緑、秋の紅葉も楽しめる。

### 洪水から守る大切な門

#### ⑥ 逆水樋門

全国的にも珍しく、長良川には堤防の中(川側)に町がある。川原町もその一つで、以前は大雨で長良川が増水すると浸水被害を受けやすかった。そこで、忠節用水に逆水樋門を設置し、長良川本流からの逆流による浸水を防ぐようにした。

### 水と親しむ

#### ⑦ コミュニティ水路

「湊コミュニティ水路」は、長良川の清流を引き込んだ忠節用水の放水路沿いに設けられている。藤棚をくぐる散策道・デッキ・八ツ橋・滝組前の沢飛石・親水階段・玉石・季節に応じた植栽などを配し、水に親しめるようになっている。水路自体にも魚の棲める深みをつくるなどの配慮がされている。水路の流量の調節は、「ロボット水門」の役割である。岐阜市内には他にも、清水川、早田川、西野町にコミュニティ水路がある。

### 水を見守るロボット?

#### ⑧ ロボット水門

昭和7年(1932)、鏡岩から元浜町に至る新しい導水路が忠節用水に直結された際、水防・放水量調節のために造られた(高さ9.5m、幅5.7m)。改修時に頂部に円錐が加えられ、丸い窓と共にロボットのような愛嬌のある外見となり、「ロボット水門」と呼ばれ親しまれるようになった。この水門は、岐阜県近代化遺産の指定も受け、文化的にも評価されている。

### 岐阜城落城・女中の無念

#### ⑨ 御手洗池

金華山々麓、岐阜公園内の北側に位置する。元々は長良川の淵だった。かつては、この池の背後にあたる金華山丸山に伊奈波神社があったため、この池で手を洗って参拝した。それがこの池の名の由来とされる。伊奈波神社は、天文8年(1539)に斎藤道三が稲葉山城に居城するにあたり、現在の場所(伊奈波通)に遷されたこととされる。慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の際、当時の岐阜城主織田秀信(信長の孫)は西軍の石田三成に加担したことにより、東軍の福島正則・池田輝政から猛攻を受けて落城した。その時、大勢の奥女中らがこの池に投身したといわれる。

### 日本でも珍しい水の博物館

#### ⑩ 鏡岩水源地水の博物館

長良川の伏流水を、岐阜市の水道水の原水として市民に供給した施設(長良川は、昭和60年(1985)3月、当時の環境庁に「名水百選」に選定)。昭和5年(1930)に、鉄筋層建てで建築されたエンジン室とポンプ室は、平成13年(2001)に国の登録有形文化財に指定された。そのエンジン室は、平成14年(2002)に「水の資料館」とされ、一般公開されている。

### 都市を貫く奇跡の川

#### ⑪ 長良川の風景

人口40万人の都市の真ん中を大河川が流れるのは、岐阜市において他にないだろう。しかも流れているのは、日本三大清流の一つ、長良川。この川が場所や季節によって見せる様々な表情・風景は、岐阜市民の誇りである。

### 金華山の滴り、最も見やすい滝

#### ⑫ 織田信長公居館跡付近の滝

岐阜公園の織田信長公居館跡と三重塔方面との間にあるのが「錦糸の隠れ滝」である。金華山で見られる滝は3つとも4つともいわれ(「信長の庭」の人工滝は除く)、雨が降った時しか見られない滝もある。金華山の滝の中では最も見やすいのが、この錦糸の隠れ滝であろう。滝の規模は大きくは無いが、四季の移ろいとともに景色に表情を与えてくれる。

### この音に心を休める

#### ⑬ 水琴窟

岐阜公園にある来園者休憩所(立礼茶席)に水琴窟がある。数寄屋風のつくりで、水琴窟はホールにあり涼やかな音色を響かせる。華松軒と呼ばれる建物の中には、青翠庵と名づけられた茶室に加え、お抹茶のサービスが受けられる立礼茶席スペースもある。菓子付きの抹茶が一服400円で楽しめる。

### だんごでもかじりながら一休み

#### ⑭ 噴水(歴博前)

岐阜公園へ歴史博物館側の入口から入ると、女神像の噴水が迎えてくれる。現在の女神像は2代目である。初代の女神像は、昭和11年開催の日本躍進博覧会に向けて昭和9年に造られたが、戦争で供出されてしまう。2代目は昭和26年に再建されたものである。その後、昭和60年に新築された歴史博物館にマッチするよう噴水が大幅に改造された現在に至っている。女神像は2代目だが、台座は初代のものである。

### 独特の建築様式と日本一の乾漆大仏

#### ⑮ 岐阜大仏(正法寺)

正法寺の大仏は、像高13.63m、顔の長さは3.6m。奈良、鎌倉の大仏と並び、日本3大仏の1つとされる。38年かけて天保3年(1832)に完成した。この大仏の作り方は珍しいもので、木・竹・粘土で型を作り、それに和紙(経典が書かれている)を貼り、金箔で仕上げている。そのため、「籠大仏」と呼ばれている。この技法でつくった大仏としては日本一の大きさである。また、大仏の胎内には木造の薬師如来像が安置されている。

### 武家屋敷を分ける堀

#### ⑯ 梶川堀

織田信長は、永禄10年(1567)、稲葉山城(後の岐阜城)主となり、当時の井ノ口(後に信長が岐阜と改名)に本拠地を移し、すぐに城下の整備を始めた。この梶川堀から東側には武家屋敷、西側には町屋を配置した。慶長5年(1600)以降、梶川堀より東側の地区は、古屋敷村となった。「梶川」とは、信長の臣下だった「梶川高盛」の屋敷が、堀の近く(現在の常在寺内)にあったことに由来するとされる。現在は、開渠になっている部分も少なく、また堀が狭いため、あまり人々の目に触れることなく、静かに流れている。

### 堀跡だけが面影を伝える奉行所跡

#### ⑰ 岐阜町奉行所跡

元禄8年(1695)に、岐阜町奉行所が開かれ、岐阜の統治や長良川の水運の管理を行なった。ここには手代屋敷・同心屋敷・道場などもあった。徳川家康は、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦に勝ち、それまで支配していなかった美濃を統治した。その際、岐阜町は幕府の直轄領、その他に加納藩、30ほどの旗本領などに分割して統治した。岐阜町が尾張藩領となったのはその後であり、町民の要望もあって奉行所を設けたといわれる。享保2年(1717)8月、尾張藩の豊奉行だった朝日文左衛門が豊の検分等で岐阜に出張した際も、この奉行所に立ち寄っている。

### 道三が遷宮

#### ⑱ 伊奈波神社

1900年以上前の景行天皇の頃、榑原の地(現在の金華山の丸山)に鎮斎したのがこの神社の始まりとされる。御祭神は、天皇の第一皇子の五十瓊敷入彦命(いにしきいりひこのみこと)である。その後、天文8年(1539)に斎藤秀龍(後の道三)が稲葉山(金華山)に入城する際に、現在の伊奈波通に遷したといわれる(神様が下下になってしまふことを申し訳なく思ったとされる)。昭和14年(1939)には、国幣小社となった。金町の金神社の祭神である淨聖斗姥命(ぬのしひめのみこと)は五十瓊敷入彦命の妃、若宮町の榑森神社の祭神が市牟雄命(いちはやのおのみこと)が五十瓊敷入彦命の子ども、という関係にある。

### 尾張藩主の御成

#### ● 岐阜町本陣跡

米屋町辺りに岐阜町の本陣があった。岐阜町は尾張藩であったが、関ヶ原の合戦の前哨戦での岐阜城落城を記念し、後年尾張藩主が岐阜町に来るのにあたり、賀嶋邸に本陣が設けられたといわれる。岐阜御成と呼ばれていた。尾張藩の歴代藩主は、必ず一度は岐阜を訪れ、ここを定宿とした。徳川宗春は、享保18年(1733)に岐阜を訪れ、鵜飼を見物したり、お忍びで伊奈波神社の門前の茶屋へ行ったりしたという。